

「生きよ」

エゼキエル書16:4-6

聖学院大学 大学・人文学部チャプレン 柳田 洋夫

秋学期の学びが始まり、全学礼拝も、本日が秋学期最初になります。毎年、今頃の時期は、シリーズ礼拝ということで、あるテーマに基づいて聖書の御言葉に聞いています。今回は、「心に響く聖書の言葉」というテーマになりました。

本日与えられている聖書のみ言葉は、何よりもまず私自身の心に響き続けてきた言葉です。ここでの「わたし」とは主なる神であり、「お前」とは直接的にはエルサレムの町のことです。しかし、聖書のみ言葉というのはいつもそうなのですが、この箇所も、同時に、神さまから私たち自身への呼びかけと受け止めながら聞くことができます。

それにしても、神さまから「お前」と呼びかけられている者は、あまりにもひどい境遇に置かれています。生まれるやいなや捨てられて、へその緒も切ってもらえないままで、血まみれでもがいている、そんなことだったら、いっそ生まれてこないほうが良かったのかもしれない。

このことに関連して、2006年に、ある衝撃的な本が出版されました。デイヴィッド・ベネターという哲学者によるもので、原題は“Better Never to Have Been - The Harm of Coming into Existence”、日本語に訳すと、『生まれてこないほうが良かった — 存在してしまうことの害悪』というものです。中身も、そのどぎついタイトル通りで、その前書きにはこのように記されています。「私たちの誰しもが、生まれさせられてしまったことで害悪を被っています。その害悪が無視できるものではなく、たとえどんなに質の高い人生であっても、人生は非常に悪いものなのです。…とはいえ、私たち自身の誕生を防ぐにはもう遅過ぎます。しかし、将来生まれてくる可能性のある人々の誕生を防ぐことはできます。というわけで、新しく人々を生み出すことは道徳的に問題があるのです」。よく生きる、ということの問題にする生命の質(QOL)という議論をも飛び越えて、とにかく人間は生まれてこないほうがよかったのだ、という衝撃的な主張です。そこにはそれなりの根拠はあって、難しく言うならば、『《快樂と苦痛がそれぞれ存在することと存在しないこととの非対称性》』ということですが、彼は最終的に、人類はなるべく早く絶滅したほうが良いのだ、とまで言います。

このベネターという人はべつに、人類滅亡をたくらむ悪の組織の一員などではないようですし、また、自分は人間を憎んでいるのではなく、愛しているゆえにこのようなことを述べるのだ、とも言っています。しかしそれでも、いろいろな倫理的問題を突き詰めていくと、そういう結論に達するしかないのだ、というのです。

このような彼の考え方を「反出生主義」などと呼んだりもしますが、実のところそれは決して新しいものでも珍しいものでもありません。すでに旧約聖書にも、同じようなことが記されています。たとえば、『ヨブ記』の主人公であるヨブは、「わたしの生まれた日は消えうせよ。男の子をみごもったことを告げた夜も。その日は闇となれ」(ヨブ 3:3-4)と、自らの誕生日を呪います。また、預言者エレミヤは、「呪

われよ、わたしの生まれた日は。母がわたしを産んだ日は祝福されてはならない」(エレミヤ 20:14)と、やはり自らが生まれてしまったことを嘆き呪います。

あまりこのような例ばかり挙げると、ネガティブなイメージばかりが印象に残ってしまいそうなので、これくらいでやめておきます。私が申し上げたいのは、誰もこの世に生まれてこなければよかったのだ、などということではありません。その反対です。私はベネターの主張に賛同する者ではありません。神の「生きよ」という叫びに聞き従う者としてここに立っています。

それにしても、神さまが、ほとんど頭ごなしに「生きよ」と言われているのは印象的です。たとえば、「今はとてもつらいかもしれないけど、もう少し頑張ればいいことがあるかもしれないから、死なないでね」などと言われたものではありません。一言、「生きよ」と叫ばれたのです。

「言うだけなら簡単じゃないか」と思われるかもしれませんが。しかし、本日与えられているところの次の節の 7 節には、「わたしは、野の若草のようにお前を栄えさせた」とあり、それによって「お前は、健やかに育ち、成熟して美しく」なったのだと記されています。主なる神は、その、うち捨てられて血まみれでのたうち回っている「お前」を自ら担い、愛し、育てたのです。そのような神ご自身の救いのわざを前提とした「生きよ」なのです。

そしてまた、さらに教会的、信仰的に言うならば、ここに、イエス・キリストの救いのみ業を透かし見ることもできるでしょう。イエス・キリストは、罪ゆえに、血まみれで死に至る苦しみと永遠の断罪の中をのたうち回らなければならなかったはずの私たちの代わりに、自らが十字架にかかり、血を流されました。そして、キリストにつながっている者たちは、私たちの代わりに罪人として血を流されたキリストの救いの業に与り、まことのいのちを与えられていることを信じています。

本日の御言葉をめぐってまた思い起こす言葉があります。精神科医であり心理学者であるヴィクトール・フランクルの著作のタイトルである『それでも人生にイエスと言う』という言葉です。フランクルは、ナチスの強制収容所に入れられ、人間としての尊厳を踏みこじられ、家族を殺されるという極限の体験をした人でした。しかし彼は、その著作の最後で、このように言います。「人生はそれ自体意味があるのだから、どんな状況でも人生にイエスと言う意味がある。そればかりか、どんな状況でも人生にイエスと言うことができる」。あらゆることにかかわらず、たとえば困窮と死にもかかわらず、体や心の病にもかかわらず、また強制収容所の中でも、人生にイエスと言うことができる、生まれてきたこと、生きていることを肯定できる、と彼は言うのです。

フランクルの言うように、それがどんな人生であろうと、意味のあるものであると私は思います。少なくとも、そのように思えたほうがよいと思います。さらに言うならば、主なる神が、無条件に、有無を言わず「生きよ」と叫ばれたことは、私たちがこの世に生まれ、また今生かされていること自体に、何らかの義務もしくは使命が伴っていることを示しているのだとも思います。また、フランクルが言うように、私たちは、「こんな人生に生きる意味があるのか」と問う者ではなく、「お前はどのように生きるのか」と、人生に問われている者である、という事実を知り、受け入れるべきだと思います。

これから始まる秋学期の学びも、深いところで、「生きよ」という大いなる存在からの呼び声に応え、人生にイエスと言うことができるようになるための貴重な機会なのだと思います。また、その学びのひとつまひとつが、この世に生かされていることの意味と使命をみなさんがそれぞれ見出すためのチャン

スでもあります。そのことを覚えて、また新たな気持ちで秋学期の学びと活動をスタートしていただきたいと願います。

2019年10月1日 聖学院大学 全学礼拝シリーズ礼拝「心に響く聖書の言葉」